

● 敦賀港開港百周年記念・敦賀短歌大会講演

歌と制作



近藤芳美

(こんどう よしみ)

平成十一年七月十日(土)、福井県敦賀市民文化センターで大会は開催されました。八十六歳の年齢を感じさせない近藤先生は、会場にいられた三百余名の方々に「短歌は詩であり志である」と、やさしく、しかし力強く話しかけられました。

* 短歌は抒情詩

今年八十六歳になりました。十代の終わりから歌を作っていましたよ。もう六十年ないし、七十年、歌を作っているということですよ。旧制中学・旧制高校にかけて広島に住んでいました、旧制中学校の先生に導かれ短歌を作りだしました。「アララギ」という結社の一会員になりましたが、ちょうど広島の外に中村憲吉という「アララギ」の同人がいて、病氣療養

してらっしゃった。会いに行きましたのが昭和七年、それからずっと歌を作っています。

皆さん短歌の作者ですから、短歌一首どうやって作ればいんどろうということに頭を悩ましていらつしゃるんじゃないかと思えます。そういった方を前にしてお話することは、結局どのように短歌を作ればいいか、短歌、作品一首どのように作ればいいかということ、私の体験の上からお話しようと思っているんです。

もつとも、どのように短歌を作ればいいのかというのは、これがわかれば一番いいんでして、私もいまだに短歌一首作るのに苦労してまして、この歌を作ったらこれから先もうできないんじゃないかというような時が始終です。まず第一に申し上げたいことは、当然のことですけど、私は短歌が抒情詩であるということをもういっぺんお考えになったほうがいいんじゃないかと思うんです。

まず私たちが知らなきゃいけないことは、短歌というのは詩の一つの形式だということですよ。だから、皆さんは短歌を作ろうとされることは詩を作ろうとされていることですよ。詩の中の抒情詩を作ろうとされている。一番当たり前のことを、皆さんは一番最初に認識しなきゃならないということ、それから、それを忘れて短歌を作ってはいけないということですよ。短歌は抒情詩ですから、韻文の世界です。散文とどう違うかを、辞書はなんと解説しているかといいますと、言葉を媒体として物事を叙述する世界、これが散文だと説明しておるんですよ。それに対しまして、言葉

を媒体として物事を表現する世界、これが韻文だと説明している辞書があります。

叙述と表現とどう違うかということなんですが、どういったことが表現なんだろうと考えてみるといい。ちょうどこの日本海側に、敦賀にまいりました。ここからは見えませんが、もう少し北へ行きますと日本海の向こうに佐渡島がある。芭蕉の有名な俳句がありますよね。

荒海や佐渡に横たふ天の川

十七文字の中で歌われているものは荒海であり、佐渡であり、天の川である。それを提示していますね。作者はそこで何も言っていない。つまり叙述はしていません。



しかし、提示し、そのことによってひとつの世界を歌い出し、ひとつの思想、感情の世界を表現している。セザンヌなんかの林檎の絵がある。誰も、その林檎の絵を八百屋さんの看板とは思わないですよ。それとは違ったものを受け取りますよね。ちょうど表現というのはそのようなものじゃないかと。その上に純粹にのっかっているのが日本の詩歌ではないかと思うんです。

*凝視

われわれ短歌を作るとき、どう作るかということなんですがね。なにか詠いたいものがあるときですね。抒情詩としてそれを表現しなければならぬ。それを実際はどういうふうにするか、普通それは何かに託して詠います。山とか川とか、それから花とかに託して詠います。一応そうしましょう。そのときに短歌を作り出す最初に教えられることがあります。私たちは最初にそのことを教えられて短歌を作り出しました。それは三つの段階を通過していくもんだと教えられてきました。

まず、最初にあるものは詠うべきもので

す。これから詠おうとするもの、まずそれに向き合います。そしてまず第一に必要なことは「凝視」だということを教えられました。

じつと見つめよ。詠いたいものを見つめよ。桜は咲いています。じつと見つめよということをお伝えしました。短歌を初心者として作り出したころ、私たちが周囲から教えられたことです。じつと見つめよということでした。歌を作り出した頃です。一緒に作り出した仲間たちが歌会なんかで自慢してらるんですよ。私はこの歌を作るために三時間、沼の前で座っていたんだよって言っている。ある一人の人は、僕はこの歌を作るために何百円かの金を使って来たんだよって言います。どっかに旅行してそこに行つてじつとものを見てきたと。桜を見て来たり、海を見て来たり、山を見て来て、そして作ったんだよって言っていましたけど、長い時間をかけてじつと詠うものを見つめよということをお伝えされました。

「凝視」というのは必ずしも時間をかけることではないですよ。しかし、やはり、心を集中してこれから詠おうとするものを

じつと肉眼と同時に心の目で見つめることが第一ですよ。サーッと見て作れるもんじゃないんですよ。そのことが第一です。

***把握**

じつとものを見ていくだけで歌ができるかというのできないですよ。どうするかというと、まず「凝視」の次にくるものは今度は「把握」という言葉です。

「把握」ということを言いますね。捉えよということと言います。じゃあ、「凝視」したものの、桜の花がある、薔薇の花がある、じつと見つめている。その中から「把握」したものって、何であろうと。何を「把握」すればいいんだろう。何をつかまえ出せばいいんだろうということなんですよ。

***無くてかなわぬもの**

これに対して、斎藤茂吉という歌人がいます。斎藤茂吉のことをここで言わなくてもいいと思いますけど、やはり、近代を代表する歌人ですよ。この人の初期の歌論集があります。『短歌写生の説』という、若いころ書かれた歌論集があります。私も短

歌を作り出して初めのころ、その歌論集を読んだことがあります。

斎藤茂吉は、しきりに「写生」なんていうことを言ってます。その中でその「写生」という文学論、斎藤茂吉が独特に展開されていますけど、その中で「無くてかなわぬもの」という言葉を書いてらっしゃいます。「凝視」した対象の中に必ず「無くてかなわぬもの」がある、そういうことを言われています。

「無くてかなわぬもの」というのは、これは古い、文語体の聖書のごく初期のころの翻訳されてる言葉なんだそうです。多分、斎藤茂吉は中国からなにかで翻訳された聖書を和訳されたものから発見された言葉だと思っんです。「無くてかなわぬもの」という言葉をなんか読んで発見しまして、「これこれ」と思ったらいいんですよ。必ず対象の中には「無くてかなわぬもの」がある。それを表現せよということなんですよ。これが短歌を作る一番基本だと言われているんです。

で、「凝視」と「把握」と、それをきつとすくい上げて言葉としていくと、表現です

よね、それも非常に余分なものまでくっついてきます。「把握」したもんだから、当然、いろんな、余分なものと一緒に、こう一緒にすくい上げてきます。「無くてかなわぬ」と思っただけでも余分なものがあります。今度はそれを洗いなおしていくことですよ。捨て去っていくことです。捨て去っていったら一番純粋な「無くてかなわぬもの」である形にもっていくこと。これが表現ですよ。

「無くてかなわぬもの」という言葉は斎藤茂吉が使っただけじゃありませんけど、私は、あるいはそれをちやうど東洋医学であるツボという言葉で言ってもいいし、あるいは一つの節のようなもんかもしれない、結節かもしれない。ある一点を押さえて、そこからサーッとひとつの世界が広がっていくものが必ず対象の中にあると。それを私たちは探し出し、発見し、発見したものを表現していくと。これが短歌を作る一番基本になる道筋じゃないかと思ってる。で、短歌を作り出したら最初にそのことを教えらる必要があるし、そのことをなんらかの形で知って短歌を作っただけじゃないと、ただ

三十一文字の言葉を並べただけの、表現ではない、純粹のお話の歌になっていくんじゃないかと私は思うんですがね。

私たち短歌を作るときにその三つの段階を一瞬のうちにほとんど、三つの段階と言いましたけど、ほとんどその三つの段階を一瞬のうちにしていくことが短歌を作ることではないかと私は思ってるんですがね。

* 茂吉の歌の場合

空論になっていくんで、例を申し上げます。中国の、昔、満州といった東北地方に旅行しました。満州事変（一九三一年）が終わって何年になりますかね。ずいぶん経っていくんです。その満州事変がわれわれの生きてきた近代史の原点だと私は思ってるんですが、その満州事変が始まる直前に、斎藤茂吉が同じように満州に旅行されているんです。

当時ですから鉄道ですよ。長い旅行さよなして、このごろのような旅行と違いますよ。飛行機で行くのと違いますよ。長い旅行されまして、最後に満州から北京

へ行かれたんですが、そこで旅行を終えられたんです。多分静かな中国ですけど、やがて来る満州事変に続く戦争の時代を前にしていた、一種の緊張感、あるいは、そういった事件の予感をたたえていた静かな北京だったと思う。

そこに行かれまして、そして、日本に帰られるんですよ。同じように鉄道に乗って、満州鉄道に乗り、朝鮮の鉄道に乗ってあるいは敦賀から帰られてくるんでしょう。その旅行の最後ですよ、北京の駅を発た



れてこれから日本に帰ろうという列車の中です。多分斎藤茂吉は車窓からずっと外を見ていたんでしょう。こういった歌を作ってらっしゃいます。

畑中に人を葬るさまが見ゆ馬ひとつ其処に佇み居りて

こういった旅行詠を作ってらっしゃいます。おそらくこの歌を皆さんあまりご存じないでしょうし、いわゆる斎藤茂吉の代表的な名歌とはされていませんよ。ただ、ほかにいくらかでもいわゆる名歌とされる歌がありますが。ただ、これをお話するのにたいへん都合がいいと思うんで、私はいつも例にするんですがね。

北京を出ますとずっと華北の平原が続きます。その先に万里の長城がある山々が続いて、山海関という関所があつて、それを越えたら向こうは満州ですよ。その平原を、平原がずっと車窓に写ってるんですよ。何かの畑、麦畑かあるいはキビ畑か、それがずっと続いているんです。

畑中ですよ。あるいは、もう夕暮れかもしれない。ふと見ていると、その広い荒涼とした畑の続く平原の中にお葬式が見えてく

るんですよ。農民たちのお葬式が見えてるんですよ。中国のお葬式というのは土葬ですよ。土葬するところまで馬車に棺を乗せていきます。棺のまわりにはいっぱいろんなもの飾ってありますよ。紙で作ったもの、花だとか御殿だとか、あるいは紙幣を飾りますよ。紙で飾り立てた棺がおそらく馬に引かれて土葬の場所まで連れて行かれるんですよ。土葬の場所もこう広い平原の真ん中ですよ。人を土の中に埋めます。そして、棺と一緒に運んで来た紙で作った御殿、紙で作った紙幣はその場で燃やされます。火をつけて燃やされるんですよ。そういったお葬式の様子が車窓から見えてるんですよ。「畑中に人を葬るさまがみゆ」。そこまではわれわれも詠えるかもしれないですよ。長い農民の生涯を終えてこれから土に帰していくお葬式のサマですけれど、詠えますよ。

「馬ひとつ其処に佇み居りて」と詠えるかというとむつかしいですね。ふと気がつきますと、お葬式が行われてる少し離れたところで、その棺を運んできた馬車でしょうか。馬が忘れられたように立っているん

ですよ。呆然として立ってるんですよ。そして、馬は馬で草かなんか食べてるんですよ。「馬ひとつ其処に佇み居りて」というのが、この場合「把握」であり、この場合「無くてかなわぬもの」ではないかと私は思っている。

そのことによつてその情景の持つ雰囲気、あるいは作者の感傷がくつきりとして描かれてきます。それがなければただの描写ですよ。これによつてその世界が浮き上がつていくんじゃないかと思つて、これが「把握」ではないか、これが「無くてかなわぬもの」ではないかと私は思っている。

いずれにしろ「把握」であり、「無くてかなわぬもの」が何であるかということをは申し上げようと斎藤茂吉の例を引いたんですが、もつと晩年がありますよ。晩年の歌がいいかもしれない。これは皆さんご存じでしょう。

最上川の上空にして残れるはいまだうつくしき虹の断片

これは名歌ですよ。斎藤茂吉が晩年疎開先で病み、敗戦を迎えます。多分、斎藤茂吉は最後まで日本の勝利を信じていたし

願つてもいたんでしょけど、無惨な形で日本が敗れます。そして、茂吉自身は病み、疎開先の孤独の生活に入っていく。最上川の近所の大石田というところですよ。「最上川の上空にして残れるはいまだうつくしき虹の断片」という虹の一片が残っている、まだ美しさを保っている虹の断片が残っている。斎藤茂吉は何も言つてませんよ、茂吉が自分がどんなに孤独であると、どんなに寂しいかと言つてません。叙述はしていません。最上川の川上に残つてる一片の虹だけ、「凝視」し、「把握」し、表現してますよね。ただ、さっきの歌は馬である。

今度の歌は虹である。
多分、私が「アララギ」に入ったところに「アララギ」に載つた歌があります。こんな歌です。

コスモポリイはさもあらばあれ心燃えて
垂たに一國を憂ふる者ぞ

「コスモポリイ」というのは国際主義ですよ。そこには虹もなければ馬もいませんよ。コスモポリイという、ひとつの思想の世界と、それは「さもあらばあれ心燃えて垂たに一國を憂ふる者ぞ」という、自分の



心の中のことですよね。戦争の歌ですよ。満州事変から続いていく戦争の歌ですよ。戦争の中の歌でしょう。詠っているものは虹でもなければ馬でもない。自分の心の中にある、考えである、思いである。しかし、それさえ客観的な対象でしょう。自分の中だつて同じですよ。あるいは、こころの中にある思想だつて同じことでしょう。同じようにこれを「凝視」し、「把握」し、表現していくという意味では同じだと。斎藤茂吉はこれを「写生」と言っていました

けど。

*「詩」は「志」なり

それで、ぼつぼつもう結論にいかなきゃいけないんですけど、もういっぺん詩ということに帰りましょう。われわれは詩を作つてると言いましたよね。われわれはお互いに詩人であることを志さなきゃいけないということですよ。

詩というのは何だろうかというんですよ。中国の思想があるんです。中国の言葉にこういったことがあります。「詩は志なり」と。詩はボエジーですよ。詩なりというその詩は今度は志です。中国の詩の考への一番根本にあるんですよ。日本に、詩は志であるという言い方はほとんど伝統的になかった。あるいは、伝統的にあつたけど、それは継承されなかつたようだ。しかし、詩が志である。何かの心の表現であり、心の向こうのほうの表現であるという思想が根本的に日本の詩歌の伝統の中で欠落しているんじゃないかと時々思うことがあるんです。私たちはもう日本だけで生きているわけではないし、もっと大きい世界

の中で生きている。世界の中に生きていますよね。世界の歴史の中で生きている。その中で志を述べるのは何なのでしょう。何を詠えばいいのか、花を詠い、山を詠い、海を詠い、恋だけを詠っただけでいいのか。それしかないのか。まだまだ詠うことがあるんじゃないか、しなきゃならないことがあるんじゃないか。

短歌は行き詰まっていると云われますけど、まだまだそういったことは未開拓、残つてんじゃないかと思ひまして、私はこの年までまだ歌を作っていますが、今日皆さんにお話したいのは、短歌一首どのように作るかという一番基本のことを、一番最初に知って歌を作らなきゃいけないということをお話したかったです。詩であるために何が足りないか、詩とは何であるかということの時々思つてもいいんじゃないかと思うんですよ。つまらない話をしましたけど、こういったことを申し上げまして今日の話を終えます。(拍手)